

さやいんげん（普通・抑制）

栽培暦

月	4	5	6	7	8	9	10	11
作型								
普通		—	—	—	—	—	—	—
抑制						—	—	—

栽培の特徴とポイント

1 温度

生育適温は 15～25 で、30 以上の高温では花落ちが多くなり莢つきが少なくなる。耐寒性は弱く、軽い霜でも被害を受ける。発芽適温は最低 15 、最適 20～30 、最高 35 である。

2 土壌

土壌の適応性は広いが、酸性に弱く、pH 5 以下では生育が悪く、pH 6 前後が最適である。多湿土壌では湿害を受けやすく、生育が著しく抑制されるので転換畑では水はけを良くし、高畝とする。連作をすると病害の発生が多くなるので、4～5年の輪作をする。

品種

セレモニ - : つるなし、すじなし、丸莢の早生豊産種。莢は従来の品種に比べ濃緑で、長さ（タカヤマ）は 12cm 位、柔らかく曲がりが少ない。草丈は 50cm 位、播種後 55 日位で収穫期に達する。

モロッコ : つるあり、スジなしの平莢種。露地では播種後約 58 日で収穫できる。草勢強く、（タキイ）着莢良好で多収、品質が良い。

栽培管理

1 施肥（施肥例参照）

いんげんは根粒菌の着性が少ないため、まめ科作物の中では多肥性である。堆肥と苦土石灰を植付け 25～30 日前に施肥し、深耕する。播種の 10～15 日前に基肥を施用し耕起・畝立てし、グリーンボリでマルチを行う。倒伏防止のため支柱及びネットを張る。

2 播種

播種期は普通栽培では晩霜の心配がなくなる 5 月上～中旬頃が適期である。抑制栽培では 7 月下旬～8 月下旬であるが遅れると収量が低下しやすい。1 ケ所に 3 粒まき 2 cm 位土をかけ、しっかり押さえて種子と土を密着させてから水をまく。

発芽不良による欠株を防ぐため、雨天の日や過湿条件での播種を避ける。

種子量は 6 リットル/10 a ほど必要である。

3 栽植密度

畝幅 150cm × 株間 30cm × 2 条植え（1 ケ所 2 本立て）= 4,400 株/10a

4 間引き、補植

間引きは遅れないように行い、本葉が2枚になった頃、2本立てとする。

欠株を生じたところは、間引き時の苗を根が傷つかないように掘り取り補植する。

施肥例 (kg / 10a)

肥料名	基肥	追肥		成分量			有機化成：やさい有機10号 高度化成：そさいS33号 追肥は畝間に施用
		1回目	2回目	N	P	K	
完熟堆肥	2,000						
苦土石灰	150						
有機化成	70			7.0	7.0	7.0	
高度化成	20	20	20	7.8	7.8	7.8	
熔成燐肥	40				8.0		
計				14.8	22.8	14.8	

5 追肥

開花始めと1回収穫後の2回追肥する。

6 かん水

梅雨明け後の高温乾燥期には草勢が低下して、着莢率の低下や曲がり莢の発生等がおきやすいので、過湿にならないように適度のかん水をして草勢の回復を図る。

7 主要病害虫と防除方法

アブラムシ：新芽・新葉・花・莢などにたくさん群がり、多発すると生育が遅れたり、莢の肥大が悪くなる。播種時や株がまだ小さいうちに粒剤を株元に施用するのも効果的である。

ハダニ：被害を受けた葉の部分は、色が抜けてカスリ状になる。多発すると葉全体が黄変して株も弱り最後には枯死する。直接莢に寄生することもある。同じ薬剤の連用は禁物。ほ場の中や周囲を清潔にすると発生が少なくなる。

ハスモンヨトウ：葉の表の薄皮を残して食べる。多発するとほ場の一画が丸坊主になる。早期の防除や、幼虫ごとに葉を切り取って処分するのが、効果的である。

炭そ病：葉や莢に褐色のくぼんだ病斑をつくる。種子伝染、土壌伝染をするので連作を避け、種子の選別や間引き、マルチを行う。

収穫・調製

1 開花後7～10日位の種の部分がふくらむ前の若い莢を収穫する。大きさは10cm位とする。収穫時期が遅れると品質が低下するため、最盛期には毎日収穫が必要となる。収穫作業は品質保持のため、莢の温度が上がらない朝、又は夕方に行う。

2 一斉収穫を行う場合は、栽培株の半分の株が開花した日から数えて30日後に収穫する。調製は、形状、色沢がよく、病害虫等に侵されていない、過熟でないものを莢の長さでL(12cm以上)、M(10cm以上)、S(10cm未満)に区分する。